

春日部福音自由教会 2020年7月19日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）
聖書 新約聖書 マルコの福音書 8章 22節～26節
説教 「だんだん見えてくる」小野信一牧師

おはようございます。

2020年の7月19日の主の日の礼拝を共にささげております。神様のなされる奇跡には、一瞬の奇跡もあり、また段階を踏んでの奇跡もあります。時間がかかったり、そのプロセスが描かれていたり、その前後が書かれている奇跡もあります。今日のみことばマルコの福音書8章の22節から26節には、再びイエス様が触れてくださる、一回ではなく一瞬ではなく、少しずつ見えてくる、少しずつ癒やされていく、という奇跡の出来事が記されています。もう一度祈りを共にささげましょう。

お祈りをいたします。

天にいらっしゃる私たちの父なる神様。あなたの御名を崇めます。日曜日の朝、週の初めの日、まずあなたの前に出て礼拝をささげます。主の日、主イエス様がよみがえられて今日も生きておられることを覚える日曜日、あなたの前に私たちのからだを献げ、賛美を献げます。どうか私たちの献げるものをお受けください。今みことばが開かれ朗読されました。このみことばによって、イエス様の姿を私たちに見せ、イエス様のお心を教え、イエス様のお声を聞かせてください。主イエスキリストの御名によってお祈りします。

アーメン。

I だんだん見えてくる ①

今日のイエス様のみわざは、だんだん見えてくる、というみわざです。ベツサイダの町で一人の人がイエス様に触れていただき、重ねて触れて頂き、だんだん見えるようになっていきました。私たちもまた、今だんだん見えるようになって行く途上にいます。人間のことがだんだん見えてくる。そして自分のことも、世界のことも、だんだん見えてくる。自分には見えていなかったんだなあと感じつく時に、そこからまただんだん見え始めます。

一方、自分は見えていると思う人は、「イエス様助けて下さい」と言いません。自分は見えていないと気づく人、認める人が、「イエス様助けて下さい」、「私の目を見えるようにしてください」と言うのです。

ただ今日の箇所は短い箇所、22節から26節までの短い段落で、この人がどんな人だったか、見えるようにしてくださいと願ったのかどうかとか、この人自身がどんな信仰を持っていたかとか、そういうことは書いていません。ただイエス様の方がその人の手を取って連れて行き、触れてくださいました。ベツサイダの村で人々が「この人に触ってあげてください」という願いをしたのに応じて彼を連れて行ってくれたのです。

ヨハネの福音書 9 章にも盲目の人の癒やしが出てきます。あの Amazing Grace の賛美歌で歌われているように、“かつては見えなかった、しかし今は見える”と言ったあの人ですね。そのヨハネの 9 章全体にわたるその出来事の中で、最後のところで、イエス様が言われます。「あなた方は自分が見えていると思っている。だからあなた方の罪は残るのです。」イエス様はそう言われました。見えるとか見えないということは、この肉の目のことだけではないのです。信仰の目、あるいは心の目、霊の目のことを、イエス様は言っているのです。自分が見えている、分かっていると思っていた人たちがいました。自分が見えていると思ったことが、その人達の間違いだったのです。

II ベツサイダでの奇跡

今日は、このベツサイダでイエス様に触れられた一人の人を通して私たち自身の歩みと重ね合わせて、みことばを聞いていきたいと思えます。イエス様と弟子たちは、船に乗って向こう岸からやってきてベツサイダに着きました。すると人々が目の見えない人を連れてきます。「彼に触ってやってください」とイエス様に願いました。ここにはイエス様のことばが特に書いてありません。“分かったそうしてあげよう”とか“いつからそうなのか”、“何を信じるか”とか“何をしたいか”とかそういうことばはそこにはありません。ただその人の手を取って村の外に連れて行かれたと書いてあります。村の外、みんながいる場所、みんなが見ている場所ではない所に、その人を連れて行く、一対一になって、二人だけでという風には書いていませんけれども、人のいない所に連れて行ったということでしょう。そして彼の両目に触れます。手に唾をつけて、両目に触れて、目の上に両手を当てて、そして尋ねました。「何か見えるか。」彼は見えるようになります。見えなかった人が見えるようになる。彼はこう言います。「人が見えます。木のようです。」「歩いているように見えます。」彼は見えなかったところから見えるようになったのです。しかしはっきりとは見えていません。ぼんやりと見ている状態です。

思ったよりも見えてない、ということに人が気付くと、そこからまた見えるようになっていくということがあります。しかし気づかない人、なんとなくぼんやり見えていて、それでも“自分が見えている”って思うと、その人は見えていないということが分からないままに留まります。

この人はだんだん見えていきました。イエス様が再び両手を彼の目に置いてくださった。そして彼はどうしたか。「じっと見ている」じっと見続けたのです。見ようとし続けました。すると目がすっかり治った、そして全てのものがはっきりと見えるようになった、というのです。人間が見えてきました。世界が見えてきました。この人は見えなかったところから、半分見えるようになり、そしてすっかり見えるように、全てのものがはっきり見えるように、変えられていきました。

この場面は、目の見えない人が手を引かれて歩いていくところから始まります。

Ⅲ 誰に手を引かれるか

ある静まりのセミナーに参加した時に、二人組になって体験するっていうことがありました。一人がタオルで目隠しをしてですね、もう一人の人が手を引いて歩くっていうのです。それをしたのは、静岡の裾野の茶畑がある場所でしたけれども、そのお茶畑のあるお庭ですね、二人交代で、確か私は最初目隠しをして、そして手を引かれていき、途中で交代をして、もう一人が目隠しをして戻る、ということをしました。全然思っていたのと違う場所にいたので驚きました。ついでにその時に、盲人が盲人の手を引くっていうイエス様が言われた言葉ありますよね、ブリューゲルという人がその絵を描いていますけど、それは講師の先生が二人組でやってみましょうって言ったことではなかったのですが、私は組んだ人と一緒にそれをしたのです。二人とも目隠しをして、三人目の人にちょっと見守ってくださって言って、試しにやってみようと思っちゃったのです。やってみました。怖かったです。そして思ったところに着かなかったというよりも、どこにも着かずに、なんかぐるぐる回って玄関の周りから道に出たぐらいで終わってしまいました。誰に手を引かれるかによって、引かれる方は全然違います。ちゃんと見えている人に引かれるから大丈夫なのですね。安心できる。見えてない人に手を引かれたら怖いのです。

私たちは、この一人の人の姿を見ながら、私たちの手を引いてくださるのはイエス様ご自身なのだ、ということをもう一度、今日この週の初めの日、礼拝の場で新たに思い出したいと思えます。私たちが見えないと思う時、先が分からないと思う時、どの道をどう進んだら良いか見えないと思う時、見えない私たちの手を引いてくださっているのは、見えているイエス様ご自身であるということ。私たちの羊飼いである、良い羊飼いであるイエス様ご自身である、ということを出しましょう。

Ⅳ だんだん見えてくる ②

この人はイエス様に手を取られて村の外まで連れて行かれました。村の外というのですからかなりの距離歩いたわけですね。50m、100mではなくて1キロぐらい歩いたのか、分かりませんが、かなりのところを歩いたわけです。信頼しなければついていけません。手を引かれて、この人について行って大丈夫だと思わなければ一緒に歩けない、怖くて歩けないのです。この人はついて行きました。

私たちもイエス様が私たちを連れ出す時に、あるいは私たちではなくて、一人だけ、この中から一人だけをイエス様が連れ出して、二人の時間を持つと連れ出してくださる時に、嫌だ嫌だ怖い、と思わないで、言わないで、信頼して自分の手を任せて、そして見えなくても歩いて行きましょう。見えなくてもイエス様に手を任せて信頼して歩くという場面からこの奇跡は始まります。この奇跡、この癒やしは、福音書の中のイエス様のみわざの中でも、もしかしたらもっとも私たちの、私たち

自身の人生と重なり合うものかもしれません。なぜなら多くのイエス様の癒やしは一瞬です。あっという間に治ってしまうのです。でも私たちはイエス様を信じて、「助けてください、癒やしてください」と祈っても、一瞬で全部が解決したという風にはなかなかありません。自分が一瞬で完全に変えられる、完全に癒やされるって言う事はほとんどなくて、多くの時間の中で少しずつ変えられていくのが現実だからです。ですので、パッと起こった奇跡と違ってですね、一回で終わらなかった。一回触れて終わったのではない、イエス様は二度触れてくださった、触れ続けて下さった、この癒やしが私たちの人生に重なります。

私たちもすでにイエス様に触れていただいたことがあるのではないのでしょうか。もう変えられている、もう目が開かれています、でもさらに触れていただく。すると変えられていくのです。さらに目が開かれていくのです。だんだん見えてくる。だんだん見えてくるっていうことは、すぐには見えないってことです。パッと見えたらいいですね。この先どうなる、この先の道はこれだ、行くべき道がこれ、こういう風に歩んでここで曲がってこっちに進めば大丈夫、っていう道が見える。見えたらよい。でもなかなか見えないのです。だんだん見えてくるってことは、すぐには見えないってことです。時々私たちは疲れたりイライラしたりするかもしれません。

もっと早く教えてくださればいいのに。これからの道がどうなるのか、何もかもがすっかり分かればいいのに、と思うかもしれません。でもそうでないことが多い。だんだん見えてくるということは、一方でこれからもまだなお見えるものがある、という希望です。昨日まで知らなかったイエス様の一面を、イエス様の深さを、今日知れるという希望です。そして明日もっと親しくイエス様を知ることができる、という希望です。

おぼろ月夜っていう歌がありますね。2節の歌詞ですけど、

“里わの火影(ほかげ)も 森の色も 田中の小路(こみち)をたどる人も 蛙(かわず)のなくねも
かねの音も さながら霞(かす)める 朧(おぼろ)月夜”

すべてが霞んでいる、おぼろでよく見えない、そんなような状態。何にも見えないわけではない、でもおぼろでぼんやりとしか見えない。 今日この後歌う賛美の歌は、新聖歌の “ わが目を開きて” ですが、それでも「さやに見せ給へ」と歌います。さやに見る、はっきり見えるようになる、おぼろでよく見えないところからはっきり見えるようになる。それは一瞬の時もありますが、多くの時の中で、見えたり隠れたりしながらだんだん見えてきます。

イエス様がこの人に尋ねます。「何か見えるか。」彼は言います。「見えます。人が見えます、木のように。歩いているのが見えています。」ちょっとここだけ調べたのですが、この「人が見えます」の人っていうのは単数形じゃなくて複数形でした。見えなかった人が見えてきました。人間が少しずつ見えてきたのです。この人はもし生まれつきの盲目であったとするならば、初めて

人間を見たということでしょう。人が見えます。木のようにです。人間がどんな姿をしているか見たことがなかったわけですね。聞いたことはあったかもしれないし、誰かの頭や体を触ってこういう形だ、こんな形をしている、ということは分かっていたでしょう。でも見たことはなかったのです。その彼に、人が見えてきました。歩いているようだ、でも木のように見えますって言いました。何か棒のようなものが見えます。電信柱のように杭のように見える。人間がそこにいるのですけれども、彼には柱のように木のように見えているのです。

私たちも人間がそこにいるのに、人間として見えないで何か機械の一部のように、部品や歯車のようにしか見えないということがあるかもしれません。人を見ているのだけれども人間として見てない。何か動いている、活動し、何かしているように見える、でも人間として映ってはいないという状態です。人間は神のイメージを映し出す、造り主の神に似た存在です。そういう神のかたちの人間として生きています。からだと心とたましいを持つ人間としてここに生きています。そして喜んだり、悲しんだり、傷ついたりして生きています。それがはじめはよく見えないのです。棒のようなもの、木のようなものが動いて何かしているように見えるだけ。しかしずっと見てみると、見ようとし続けていると、はっきり見えるようになる。人間がはっきり見えてくる。人間として見える。たましいを持つ生きた人として見えてくる。

まず彼は、多分最初にイエス様を見たのでしょう。そして他の人たちが見えてくる、世界が見えてくる、そして自分の手、自分の足、自分のからだを初めて見るのですよね。自分自身のことも見えてくる、そうしてすべてのものがはっきりと見えるようになった。彼が経験したのはそういうことでした。

V イエスとは誰か

この小さな癒やしの記事はマルコだけが記しています。この前後にはこの間も触れましたように、“見える、見えない”とか、“悟る、悟らない”という話の流れがあって、その中にこの癒やしの記事が置かれています。この前にはパンの話がありました。パンの奇跡、二度のパンの奇跡、それからパン種の話。パンの奇跡でイエス様はご自分が誰なのかを見せてくださいました。でも弟子たちも群衆もパリサイ人たちも見えていません。イエス様が見せようとした、イエス様が誰なのか、ということが見えない、ピントがずれてぼやけた中にあるのです。この前の箇所では「あなた方もまだ悟らないのか」と弟子たちに言うイエス様のことばがありました。ここまで弟子たちが何を見てきたか、何を経験してきたか、少し前から振り返ってみたいと思います。

マルコの福音書の始めからいろんな出来事がありました。いくつかだけですがけれども振り返ると、ペテロのしゅうとめの熱病があった。それが一瞬で癒されたって出来事がありました。嵐の湖で風

と波を叱りつけるイエス様を、弟子たちは見ました。そしてこの方は一体誰なのだろうと問い始めました。それからまた多くの癒やしを見、死んでしまったヤイ口の娘のよみがえりまでも見たのです。そしてパンの奇跡を経験し、ここに至った。イエスが誰なのか分かったかどうか、それが問題です。

そして今日の個所のこの後、ここから次は、正にその重要な問いにつながっていきます。「人々はわたしを誰だと言っているか。」「あなたはわたしを誰だと言うか。」という重要な問いにつながっていきます。そこでペテロは答えます。「あなたはキリストです。」しかしすぐ後に、「下がれサタン。あなたは神のこと思わず人のことを思っている。」と言われてしまうのですね。イエスが誰か、が見えたのです、ペテロ達は。でも、見えていて見えてないですね。半分の視野、中途半端な理解です。この8章はマルコの福音書の真ん中です。マルコの福音書は16章までありますが、ちょうど今ここが半分、真ん中あたり、一つの山であり峠であると言われます。“イエスとは誰なのか”という問い。正にマルコは、それを書こうとしてこの福音書をずっと書いていると言っても良いでしょう。イエスとは誰なのか、という問いの前半の山がここにあります。

そしてこの後8章の後半で、苦しみ、苦難の予告が始まります。そして十字架に向かって行く、捕らえられ殺される、苦難の道が始まります。そして福音書の後半がずっと続いて、最後の方で十字架を見た百人隊長が、「この方はまことに神の子であった」と告白するところまで福音書は続いていきます。

弟子たちの目は初めは見えませんでした。それから部分的に見えるようになっていきます。そして部分的に見えるから、はっきり見えるへ、変わっていくのです。この一人の男性の目がだんだん開かれていったように、弟子たちの霊の目もだんだんと開かれていきます。

そして私たちの目も同じです。皆さんは今日、イエス様に何か見えるか、って尋ねられたとしたらなんて答えるでしょうか。あなたは見えているかって聞かれたらなんて答えるでしょうか。私たちもまた弟子たちと同じように、そしてこの一人の男の人と同じように、少しずつ見えてくるのです。イエス様が誰なのかだんだん見えてくる、人間のこと、だんだん見えてくる、世界のこと自分のことが、だんだん見えてくる。ペテロのしゅうとめの熱病も長血のわずらいも、一瞬で瞬間的に止まりました。でもペテロたちの霊の目が開かれるのは一瞬ではなかった。私たちの人生もそれと重なっています。一瞬で変わるとか一瞬で分かるということはあまりなくて、(時々一部はありますが、あまりなくて) 時の中でだんだん見えてくる。

私たちはイエス様に再び触れていただく必要があります。皆さんもうイエス様に触れていただいたでしょうか。霊の目が見えなかった時に、イエス様に触れていただいて、手を置いてもらって、見えるようになったでしょうか。見えるようになったと思います。でもイエス様は再び手を置いてくださいます。私たちはもう一度、重ねて繰り返しイエス様に触れていただく必要があります。イ

イエス様、「続けて触れてください」と言い続けて、主のお取り扱いを頂き続けて、だんだん変えられて行きます。

新約聖書の一つのことばを読みたいと思います。コリント人への手紙の第二、3章の18節をお読みします。「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」 栄光から栄光へと私たちは姿を変えられていくのです。今私たちはその途上です。主と同じ姿に、主と同じかたちに、姿を変えられていく、イエスキリストと同じように変えられるっていうのですね。これは時間がかかることです、すぐパッとならないのです。昨日寝たら、今朝起きたら、イエス様と同じようになっていたってことじゃなくて、生涯をかけて、人生を通して取り扱われていくことでしょう。

VI 赦しと癒し

聞いた瞬間、頂いた瞬間に、もう完全にいただくことができる恵みもあります。“あなたの罪は赦された”、という言葉、この宣言を聞くということは一瞬だと思ふのです。キリストがすでになされた十字架の贖いのゆえに、私の過去と現在と未来も含めた全ての罪が贖われたからです。全人類の全ての罪のための身代金が、ただ一度の十字架で支払い済みになった、と信じるからです。すでに赦されています。私たちは救い主イエスキリストを信じて“私のために十字架にかかって死んでくださったのだ”と信じることによってすでに赦された。赦されているのです。しかし赦された私たちが癒やされるのには、時間がかかります。変えられるのには時間がかかります。それは私たちの人生に、生涯続く主のみわざです。

皆さんはもう救いを頂いているでしょうか。イエス様を信じて救われているでしょうか。ここにいる多くの方がすでにイエス様を信じ、その告白をし、洗礼を受けて救われていることと思います。しかし救いの中に、（救いの中にはですね、神様の子供にされるとか、義とされるとか、永遠の命を持つとか、いろんな要素がありますけれど）、今ちょっと大雑把に、救いの中に“赦し”と“癒やし”があるとすれば、“赦し”はすでに完成しています。もうすでに赦されているのです。全ての罪は。

でも癒やしはこれから完成するのです。ということで私たちはすでに赦されているという意味で、すでに救われている、すでに神の子であるということが言えるし、でも、これから癒やされ変えられ、これから救いが完成するっていう面がある。そういう違いがあるといえますか、そういう両面があるということをお覚しておきましょう。

VII 続けて触れてください

目が開かれていくのには時間がかかるのです。だんだん見えてくるのです。今日のこの一人の人の癒やしは、その私たちの人生と重なっています。悲しむ人が慰められるのには時があるのです。囚われた人が解放されるのには時間がかかります。パッと一瞬で、過去のことになるわけではありません。ですから、「イエス様、私に触れてください、私に触れ続けてください、私の目を開いてください」と言いましょう。「何か見えるか」ってイエス様に尋ねられたら、何て答えるでしょうか。「イエス様、私はもう全部見えています」と言わないで、「イエス様、なお私の目を開いてください」と祈りましょう。私たちは今途上です。部分的に見えているという段階にいます。イエス様が私たちの目に手を置いて触れて、「何か見えるか」とお尋ねになります。それぞれ答えてみましょう。なんて答えるでしょう。「見えます、こんな感じです」。率直に、出来れば正直に答えてみましょう。「見えています。でもぼんやりしています。」「イエス様、あなたのことが見えます、でもちょっとぼんやりしています。」「この世界とこれから進んでいく道のこと、ぼんやりしか見えません。」「自分自身のことも見えていますけれども、はっきり見えません」。

それぞれ何て答えるでしょうか。全部見えているという人はいないでしょう。だんだん見えてきます。そして今、私たちが今部分的に見えていて、途上にあるとするならば、ここから先の道は二つです。一つは続けてイエス様に触れていただくという道を進むこと。もう一つはそれを止める、もう触れていただかなくて結構です、という思いで歩いていく道があると思います。

「続けて触れてください」そう願いましょう。イエス様が再び両手を目に当ててくださると、そして私たちが、なおじっと見続けようとしていると、見えるようになってきます。時には時間がかかります。でも全てがはっきり見えるようになっていきます。私たちは今、イエス様に触れていただくみわざの途上にあります。

今日は交読文でイザヤ書 42 章 7 節を中心としたところを読みました。

「見えない目を開き、囚人を牢獄から、闇の中に住む者たちを 獄屋から連れ出す。わたしは主である。」と言われたそのみことばです。そして 18 節にはこうあります。

「耳の聞こえない者たちよ、聞け。目の見えない者たちよ、目を凝らして見よ」。神様は見えない私たちに「目を凝らしてみ見よ」と言ってくださいます。「何か見えるか」イエス様が問われます。

「見えます、でもぼんやりしています。」「イエス様、触れ続けてください」と言いましょう。

お祈りを捧げましょう。

主イエス様、続けて私に触れてください。私の友に触れて下さい。私の家族に触れてください。私の教会に、私の国に、この世界に、触れてください。私たちの目に、私たちの傷に、私たちの悲しみに、御手で触れてください。癒やしてください。なお目を開いてください。慰め、解放し、自由にしてください。続けてあなたのみわざを、私たちのうちになし続けてください。主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。